

博士学位論文

内容の要旨および審査結果の要旨

2018年3月16日

京都橘大学大学院
看護学研究科

本号は、学位規則（昭和 28 年 4 月 1 日文部省令第 9 号）第 8 条の
規程による公表を目的として、平成 30 年 3 月 16 日に本学において
博士の学位（看博甲第 3 号）を授与した者の論文内容の要旨および
論文審査の結果の要旨を収録したものである。

目 次

【課程博士】

1. 松田 佳子 博士（看護学） 看博甲第3号

学位論文題目：「初めて父親になる男性が立ち会い出産後に Birth-Review for Couple
を受ける効果」

論文内容の要旨	4
論文審査の結果の要旨	8

氏名（本籍）	まつ だ よし こ 松 田 佳 子 （ 大阪府 ）
学位の種類	博士（看護学）
学位の記号	看博甲第3号
学位論文題目	「初めて父親になる男性が立ち会い出産後に Birth-Review for Couple を受ける効果」
学位審査委員	主査 教授 新道幸恵 副査 教授 遠藤俊子 副査 教授 中島登美子 副査 准教授 神崎光子

論文の要旨

論文内容の要旨

論文題目：「初めて父親になる男性が立ち会い出産後に **Birth-Review for Couple** を受ける効果」
Effect of Birth-Review for Couples after Present during Childbirth on Becoming a Father

【緒言】

初めて親になることは、新しい役割に適応していかなければならない移行体験であり、ライフサイクルにおける発達課題でもある。移行とは役割の変化であり、新しい知識を取り入れ、行動を変え、それによって自己定義を変えていくことを必要とする (Meleis, 2010)。しかし、妊娠や出産といった身体的変化を伴わない父親にとっては、母親より親役割獲得は困難かつ時間を要するという特性を持つことから、出来るだけ早い時期から父親への移行を促進できるよう支援することは重要であるといえる。また、父親の子どもへの愛着と養育態度は関連しており (Brown, 2012)、満足ある夫婦関係が積極的な育児参加を促進すると言われている (小笠原, 2010)。つまり親としての役割を果たすために必要な内面的な変化として妻や子どもとの関係性の中で親になることの肯定的な思い (父親らしさ) を高めることは、親への移行を促進するとして重要であると考えられる。

これまでの父親役割獲得を促す支援としては、夫立ち会い出産が推奨され浸透してきた。立ち会い出産は、父親母親にとって劇的な体験であり、急激な状況の変化が伴う状況的移行でもあることからその変化に適応できない場合は危機的状況に陥る可能性がある。移行の性質には、変化の実際の中で不安定性や混乱、苦悩を感じるという過程を経る (Meleis, 2000)。立ち会い出産は、夫にとっては妻への支援者として役割を果たす必要性があり、自己の価値観を見出す機会ともなることから、父親への移行を促進するうえにおいて重要であると考えられる。さらに **Birth-Review** を夫婦一緒に行うことは、達成感や安堵感そして互いに労いの意を表出する機会ともなり得る。出産後に妻からの労いや感謝の気持ちを得ることは、夫にとって出産の場における存在価値を見出すことができる (佐竹他, 2010)。つまり **Birth-Review** は夫婦一緒に行うことに重要な意味があり、これからの父親としての自信を得る機会となることで父親らしさを得ることができると考える。

そこで本研究は、初めて父親になる男性が、立ち会い出産を体験し、**Birth-Review for Couple** を受けることで得られる効果を明らかにすることを目的とした。これは、立ち会い出産時における父親への移行を促進するためのケアの向上に寄与することができるとして意義があると考ええる。

【研究方法】

1. 研究デザイン：無作為割り付けにて介入群とコントロール群を設け、2 群間比較を行う実験的介入研究。
2. 研究協力者：1 産科個人病院で、妊娠 35～36 週時に立ち会い出産を希望している初めて父親になる夫であり、妊娠後期から産後 1 か月まで調査協力に同意が得られた 45 名（里帰り出産および異常分娩、新生児仮死を除く）。
3. 調査期間：2016 年 8 月～2017 年 2 月の 7 か月間である。
4. 介入：出産後 3 日目以内に 30～60 分程度、研究者が夫婦一緒に出産に対する振り返りを行うことができるように関わる **Birth-Review for Couple** である。研究者は「出産を終えて今どのように感じていますか？」等と問いかけ、夫婦一緒に出産体験で感じた思いを自由に語れるよう配慮した。
5. 調査内容：成果変数として①父親らしさ②夫婦関係満足感③子どもへの愛着④自己効力感を調査した。各々に関連する尺度として、①については、親になる移行期の父親らしさ尺度の下位概念である父親意識の高まり、子どもの存在から沸き立つ思い、妻への思い（2018, 松田）②については、夫婦関係満足度尺度（諸井, 1996）③については、母親の愛着質問紙（中島, 2002）④については、主観的な感覚としての人格特性自己効力感尺度（三好, 2003）を使用した。また剰余変数として、属性（年齢、家族構成、職業）および分娩経過（分娩様式, 所要時間）、出生児の状態（在胎週数, 体重）を調査した。
6. 調査時期：妊娠後期（35～36 週）、出産後（産褥 3 日目～退院まで）、産後 1 か月の 3 回実施した。
7. データ収集方法：成果変数に関連する尺度と剰余変数を用いて自記式質問紙調査を実施した。研究協力者を継続的に調査する必要性から、暗号化することによって連結可能匿名化を行った。妊娠後期と出産後は、研究者または看護スタッフが協力者へ直接依頼し、産後 1 か月は出産 3 週間後に郵送法にて依頼した。回答後はシール付き無記名の封筒に入れ、外来または病棟看護スタッフへ直接手渡しにて回収した。
8. 分析：属性および成果変数における介入群とコントロール群間の差は **Mann-Whitney** の U 検定を、成果変数の分析は繰り返しのある 2 元配置分散分析および **Bonferroni** による多重比較を行った。分析には、**SPSS Version21** を使用し、有意水準 5%とした。
9. 倫理的配慮：京都橘大学倫理審査委員会から承認を得て行った（承認番号 16-

11)。

【結果】

1. 研究協力者：介入群 22 名の平均年齢は 31.2 ± 5.3 歳、コントロール群 23 名の平均年齢は 31.8 ± 6.8 歳であった。また両群とも 9 割以上が核家族であり、約 7~8 割が会社員であった。分娩経過では、両群とも約 6 割が自然分娩であり、介入群の分娩所要時間は 16.42 ± 11.09 時間、コントロール群 16.38 ± 10.48 時間であった。また児の体重、在胎週数においても 2 群間に差は認めず、同質の集団であることを確認した。
2. **Birth-Review for Couple** の効果：コントロール群と介入群の 2 群間比較において、父親らしさの下位概念である父親意識の高まり ($F=10.969$, $p=0.000$) と、子どもの存在から沸き立つ思い ($F=5.848$, $p=0.007$) に有意差が認められた。また父親意識の高まりは、出産後は介入前の妊娠後期より有意に高く ($p<0.001$)、産後 1 か月は介入前の妊娠後期より有意に高かった ($p<0.001$)。子どもの存在から沸き立つ思いは、出産後は介入前の妊娠後期より有意に高く ($p<0.01$)、産後 1 か月は介入前の妊娠後期より有意に高かった ($p<0.001$)。しかし、妻への思いに有意差は認められなかった。また夫婦関係満足感、子どもへの愛着、自己効力感においても 2 群間比較に有意差は認められなかったが、時期の主効果では、子どもへの愛着 ($F=7.197$, $p=0.002$) と、自己効力感 ($F=12.004$, $p=0.000$) に有意差が認められた。

【考察】

本研究は、初めて父親になる男性に **Birth-Review for Couple** の介入を行うことで、出産後早期から父親らしさを高め、親への移行を促進することができる支援であることが明らかとなった。父親らしさとは妻や子どもとの関係性のなかで親になることの肯定的な思いである。そのなかでも、父親意識の高まりと子どもの存在から沸き立つ思いに効果が認められたことは、出産という劇的な体験を通して子どもの存在を実感し、子どもからの直接的な反応を得ることで、親としての情動に刺激が与えられ、父親としての意識を高めていくことにつながったと考える。Meleis (2010) は、移行の状況に影響する「意味づけ」に対し、その体験を語るプロセスである「デブリーフィング」が有効であると述べている。研究者の意図的な関わりのなかで起こった出来事について夫婦一緒に内省する時間を改めて作ることは、父親としての内面的な変化の気づきを意識化するとともに体験に対する自己の意味づけを可能とすることから、親への移行を促進することができたと考える。また中野 (2011) は、夫にとって妻からの肯定的な評価を得ることは自己の存在価値を見出すことができ、自尊感情を高めることができることを報告している。夫婦一緒に出産を振り返ることは、夫が実際に妻へ支援した内容や存在価値について直接的な評価を得る機会にもなり得る。そのことが親としての自己概念に変化を与えた可能性があり、父親らしさは産後 1 か月まで高まり続けることができたと考えられる。

しかし、妻への思いには効果が認められず、夫婦関係満足感においても有意差は認め

られなかった。本研究の協力者は、両群とも自ら夫立ち会い出産を希望していたことから、良好な夫婦関係を基盤として、妻の妊娠や出産に対する興味を抱き、父親としての役割を果たそうとする集団であったことが推察される。妻への愛情が強いほど親役割を果たそうとする傾向にある（鈴木，2015）ことから、妊娠後期から良好な夫婦関係を維持していたことによって、介入群とコントロール群間に有意差は認められなかったと考えられる。さらに子どもへの愛着と自己効力感は、調査時期の経過によって有意差が認められた。妻の出産に立ち会うことは、これまで妻を介して胎動などから間接的に子どもの存在を感じ取ることしかできなかった夫にとって、初めての視覚的な体験といえる。父親の自己受容には五感という感性が大きく関与している（加藤，2017）。出産の経過を通じて子どもの存在を現実的なものとして感じ、見ること、触れることなどの体験をすることによって、子どもへの愛着を高めることにつながったと考える。

【結論】

父親らしさの下位概念である父親意識の高まりと子どもの存在から沸き立つ思いは、介入によって出産後に高くなることが明らかとなり、産後1か月まで低下することなく高まり続けることが示された。

論文審査の結果の要旨

本学位請求論文は、初めて父親になる男性が立ち会い出産後に“**Birth-Review for Couple**”を受ける効果について考察した論文である。以下、本学位請求論文について審査委員が評価した点を述べる。

第一に、我が国においては少子化が進み母親の育児困難な状況が社会問題化している近年、父親の育児参加が重要な課題になっている。そのための対策は色々と取り組まれているが必ずしも効果にはつながっていない。本研究者は、そのことに着目して、パートナーである妻の出産後に男性が父親らしさを獲得するケアとして“**Birth -Review for Couple**”という方法を介入として取り上げてその効果を明らかにした。本研究は、妻の妊娠後期から出産後1ヶ月を父親が父親へと成長する移行期と位置づけて、父親立ち会い出産後に看護職である研究者が父親立ち会い出産後に“**Birth-Review for Couple**”というケアを夫婦対象に行い、無作為割り付け（RCT）によって対照群を設けた2群間比較の介入研究によってその効果を立証したものである。研究の概念枠組みには、Meleisの移行理論を用い、パートナーの妊娠後期から出産後1か月を父親らしさの発達の移行を妊娠後期（介入前）、出産後の介入後から3日以降入院期間中（介入後）、1か月健診時（介入後）の3回成果指標に関する調査を行って、父親らしさの下位概念である父親意識の高まりと子供の存在から沸き立つ思いは出産後の介入後から高まり、1か月健診時まで持続するという効果を明らかにしている。

夫立ち会い出産後に出産経験に関するレビューを行うというケアは事例研究として行われているが、本研究者は父親の発達の移行という概念枠組みによって“**Birth-Review for Couple**”という夫婦対象のレビューを介入として取り組み、父親らしさの発達という効果を介入研究として明らかにしたことの研究価値は高い。また、この研究の成果は、父親の育児参加に寄与する対策への示唆を与えるものとしての社会的意義も認められる。

第二に、本研究は、研究者としての研究の積み重ねと助産師としての実践経験によって、父親らしさの発達の移行をもたらすケアとして“**Birth-Review for Couple**”独創性のあるケア方法を介入として取り上げ、夫立ち会い出産を行っている施設のうち研究協力の得られた個人医院で研究協力の同意の得られた夫立ち会い出産を行う予定の妊娠後期の妊婦の夫を無作為割り付け（RCT）によって介入群と対照群に分け、出産後1か月健診までを妊娠後期、出産後3日以降入院期間中、1か月健診の3回、父親らしさとその関連要因を成果指標として測定を行っている。成果指標には研究者自らが開発した父親意識の高まり、子どもの存在から沸き立つ思い、妻への思いの3つの下位尺度からなる父親らしさ、子どもへの愛着

尺度、夫婦関係満足度尺度、人格特性自己効力感尺度等、尺度の信頼性が認められている尺度を用いている。分析には統計ソフト SPSS statistics Ver.21 を用い、記述統計のほかに、**Man Whitney** の U 検定、二元分散分析、多重比較を行った。その結果、介入群、対照群の 2 群間の時期別比較によって父親らしさの 3 つの下位尺度のうち、父親意識の高まり、子どもの存在から沸き立つ思いは介入群の方が対照群よりも介入後の産後早期、1 か月健診時の測定時期毎に測定値が統計的に有意に高くなっていることを示し、介入効果を立証した。

研究課題に適した研究方法を選択し、厳密な方法によって研究を進め介入効果を立証している。本論文には研究課題の独創性、研究プロセスにおける一貫性、整合性が認められる。

第三に、**Meleis** の発達移行理論を用いて父親らしさの移行という概念を明確にし、“**Birth-Review for Couple**” という独創的なケアを一貫性のある厳密な研究プロセスによってその効果を立証している。しかし、成果指標とした父親らしさの下位尺度のうち妻への思い、夫婦関係満足度、人格特性自己効力感には 2 群間の有意差は認められていない。今後、その原因の検証及び、出産後の 1 か月健診時における 2 群間の有意差には“**Birth-Review for Couple**” という介入以外の変数、例えば自宅における父親の養育態度やその他の家族の支援が影響していないか等についてのさらなる検証のための研究に取り組むことが望ましい。

2018 年 2 月 8 日、本学内において看護学研究科会議を開催し、学位論文の請求内容とそれに関する事柄について主査より説明の上、当該研究科博士後期課程担当教員が可否の審議を行った。

その結果、本学位請求論文を合格と認めた。

博士学位論文 内容の要旨および審査結果の要旨

発行 2018年6月7日
発行者 京都橘大学大学院 看護学研究科
607-8175 京都市山科区大宅山田町 34
TEL 075-571-1111 (代表)